春の岡山県高校野球を振り返って

関西 光る集中打

春の岡山県高校野球大会（山陽新聞社後援）は4日、関西が5年ぶり12度目の優勝を飾り、中国大会（6月1～3日・広島県）の出場権をつかんで閉幕した。夏の岡山大会のAシードを獲得した4強を中心に戦いを振り返る。

全23試合で得点は205点、安打は413本に上った。昨年（165得点、378本）は好投手が多かったとはいえ、どのチームも打力を高めてきた印象だ。

関西は27得点、6失点（4試合）と攻守に安定していた。4強トップのチーム打率3割6分4厘の打線は全試合で2桁安打。特筆すべきは集中打で、1イニング3安打以上は計9度を数えた。3番白井が20打数10安打、5番片山が毎試合の計9打点を挙げるなど、中軸の振りは特に鋭かった。

故障明けのエース栗原を1イニングのみの登板にとどめる中、背番号1の右腕赤穂が12回⅓で無失点。決勝は遊撃兼任の白井が3失点完投、2回戦は左腕森井が8回を被安打1と、層の厚さを見せた。

準優勝の倉敷商は、自慢の打線がチーム打率2割8分にとどまった。1番祐屋が17打数8安打を放つも本塁を踏めたのは1度だけ。田口と藤田が交代で務めた4番を固定し、上位の出塁をより確実に得点につなげたい。

5年ぶりの優勝を飾り、閉会式で表彰を受ける関西ナイン＝4日、倉敷マスカット

倉敷商 投手陣底上げ

投手陣は底上げされた。制球が課題だった左腕エース木村と右横手小原が計26回で3四死球と不安を拭い去った。長身右腕の品木、130㌔台中盤を計測した1年生左腕永野の台頭も収穫だ。

4強の光南と倉敷工は、秋からの成長を感じさせた。光南は主砲大塚が8四死球と徹底マークに遭うも3番岡田が打率5割を残し、3試合で22得点。計20失点の投手陣の整備が今後のテーマだ。打線が活発だった倉敷工は昨秋の中国大会に出場した理大付、創志学園のシード2校を連破。右横手の石井が両試合で右の強打者たちを苦しめた。

創志学園、山陽、明誠学院、玉島商が8強。創志学園はプロ注目右腕の西を登板させず、速球派の草加が経験を積んだ。山陽は10打数6安打の漁府ら2年の打力が光った。明誠学院は左腕横川が粘り強く投げ、玉島商は頼みの上位打線が抑え込まれた。

シード校の理大付と学芸館は初戦の2回戦で敗退。ともに要所で投手陣が踏ん張れなかった。復活の兆しを見せたのが岡山東商、岡山南の伝統校。岡山東商は2年生左腕村上が創志学園打線に真っ向勝負を挑み、岡山南は右の高城が倉敷商打線を抑えた。九回2死から大逆転劇を演じた興譲館、初出場で1勝を挙げた就実、打線が力を発揮した美作の健闘もあった。

平成から令和にかけて行われた夏の前哨戦。近年、新興勢力に押され気味だった、かつての甲子園常連校の活躍が目立った。今春、5年ぶりにセンバツ出場を逃した岡山勢。ここからチーム力を高め、新時代最初の甲子園切符を勝ち取るのは果たして！。（岡崎創史）

熱戦の跡

大会総括

関西 5年ぶり頂点

春の岡山県高校野球

春の岡山県高校野球大会（山陽新聞社後援）最終日は4日、倉敷市のマスカットスタジアムで決勝があり、関西が倉敷商を5－3で下し、5年ぶり12度目の優勝を飾った。関西は1点を追う四回、4安打を集めて逆転し、九回は2死から2点を追加した。右腕白井は再三ピンチを招いたが、最後まで投げ抜いた。

関西は県代表として中国大会（6月1～3日・広島県）に出場する。

〝3度目の正直〟 集中打で逆転 宿敵撃破

平成の30年間で、甲子園出場16度を誇る関西と9度の倉敷商。宿敵同士の頂上対決で昨春、昨秋と涙をのんだ関西が〝3度目の正直〟を果たした。「まじでやり返すという気持ちだった」と主将片山。3連敗は名門のプライドが許さなかった。

エース左腕の木村を立てた倉敷商に対し、関西は右打者7人を先発起用。10安打は全て右打者が放った。中でも1点を追う四回1死二、三塁からの片山、赤穂、石野の連続適時打は全てライト方向。片山は「引っ張ろうとすると崩される。おっつける意識だった」。力任せに振り、木村の前に散発5安打に終わった秋の経験を生かした。

この場面、ベンチから右打ちの指示は特にはなかった。浜田監督は「引っ張り専門みたいな選手ばかりなのに、勝負どころでは知らぬ間に対応してくれる」と目を細める。スイングの鋭さだけではない。この柔軟さこそが全試合2桁安打の打線を支える。

投げては遊撃が本職の白井が走者を再三出しながら粘り強く完投。準決勝で好投した石の赤穂、左腕森井らが故障明けのエース栗原をカバーした。その栗原はこの試合で記録員としてベンチ入りし、頼りになる仲間たちの姿を目に焼き付けた。

決勝で倉敷商を破っての春制覇は、最後に聖地を踏んだ2014年以来。「夏の甲子園で勝ち続ける」。白井の言葉は大言壮語に聞こえない。（岡崎創史）

【倉敷商－関西】4回表関西1死一、三塁、赤穂が右前打を放ち、2－1と勝ち越す。投手木村、捕手岡田＝倉敷マスカット

▽決勝

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
関西	0	0	0	3	0	0	0	0	2	5
倉敷商	0	1	0	0	0	0	0	0	2	3

▽三塁打 熊丸、福島▽二塁打 片山、田口

【評】4試合連続2桁の10安打を放った関西が逃げ切った。1点を追う四回1死一、三塁から片山、赤穂、石野の3連続右前適時打で逆転。九回は2死無走者から、森安の中前打と四球で一、二塁とし、熊丸の左中間三塁打で決定的な2点を加えた。右腕白井は10安打を浴びながら要所を締め、3失点完投。2戦連続無失策と守りも堅かった。

倉敷商は二回に原田のスクイズで先制。その後は好機を生かせず、九回に樽本の適時打などで2点を返したが、反撃が遅すぎた。（田井香菜子）

関西		打	安	点
⑥	塩見	3	2	0
④	熊丸	3	1	2
①	白井	5	2	0
②	岩本	4	0	0
⑦	片山	4	2	1
7	江浦	0	0	0
⑧	赤穂	4	1	1
⑨	石野	4	1	1
③	恋田	4	0	0
⑤	森安	4	1	0
	計	35	10	5

倉敷商		打	安	点
⑤	祢屋	5	3	0
⑥	川井	5	1	1
⑦	樽本	3	1	1
③	田口	5	2	0
⑤	谷	3	1	0
④	原田	3	0	1
⑧	福島	4	1	0
②	岡田	3	1	0
①	木村	1	0	0
H	藤田	1	0	0
1	小原	0	0	0
H	岡	0	0	0
	計	33	10	3

関3311071
倉3431210　捕球機会失残併

倉敷商 残塁10 好機生かせず

倉敷西は相手と同じ10安打ながら残塁は10。今大会初めて追う展開に焦りも生じたか。逆転された後、得点をなかなか奪えず、流れを引き戻せなかった。森光監督は「場面ごとに求められる打撃を徹底していかないといけない」と指摘した。

チャンスはあった。五回2死満塁で、それまで2安打の田口が直球に「力負けした」と三飛。六回は福島の三塁打などで2死二、三塁としたが、代打の藤田が左翼に高々と飛球を打ち上げた。日替わりで4番を務めてきた田口と藤田が凡退し、勝機は遠のいた。

チームとして低く強い打球を意識し、7得点した準決勝とは対照的な内容。「いざというときに力が発揮できないのは気持ちやプレーで甘さと隙があるから」と主将の岡田は受け止める。

2年連続の優勝は逃したが、大会を通して左腕木村や右横手小原、長身右腕の畠木らが奮闘。不完全燃焼だった打線に比べ、投手陣が経験値を上げたことは指揮官も収穫と認める。

2012年夏を最後に遠ざかる甲子園。壁を突き破るには、好機での勝負強さがテーマになりそうだ。（田井香菜子）

9回裏、倉敷商の樽本が中前適時打を放ち、3－5とする。捕手岩本

決勝

倉敷商 打撃本領

三振はゼロ コンパクトに14安打

▽準決勝
光南 0001000020 3
倉敷商 0010100014× 7
▽二塁打 岡田（光）藤尾、谷、祐屋▽暴投 三村、藤田、畠木

【評】倉敷商は14安打と打線が力を発揮した。同点の八回2死から原田と川井の安打などで満塁とし、押し出し四球で勝ち越し。さらに祐屋の左中間二塁打で走者を一掃した。先発右腕の畠木は直球に威力があり、7回1失点にまとめた。

光南は八回に藤尾の中越え二塁打で追い付き、九回も2死満塁と粘ったが、及ばなかった。序盤の先制機を生かしたかった。（岡崎創史）

【光南―倉敷商】8回裏倉敷商2死満塁、祐屋が走者一掃の左中間二塁打を放ち、7―3とする。捕手藤尾―倉敷マスカット

30年前の夏、平成最初の県代表として甲子園の土を踏んだ倉敷商が、令和のオープニングゲームで本来の姿を取り戻した。2試合で計11安打3得点と湿っていた打線が14安打7得点。八回に走者一掃の二塁打を放った祐屋は「今度はバッターが助けようと、野手で話し合っていた」と胸を張る。

2死無走者から4点を挙げた八回は1点を勝ち越し、なお満塁で左の祐屋。外角直球を打ち返すと、この日4本目のヒットは左中間を抜けた。七回2死三塁では左の谷が外角の球を逆らわず、左翼に二塁打を運んだ。

練習試合では2桁安打が当たり前の打線は今大会に入り「今までこんなに打てないことはなかった」（祐屋）と、もがいていた。名誉挽回のチャンスをくれたのは2戦1失点と踏ん張った投手陣。その力投に応えないわけにはいかなかった。

フライアウトが目立った準々決勝後、ロングティーの距離を短めに設定。高めの球を上からたたき、近くに置いたネット目掛けてライナーを飛ばす練習を繰り返し「その意識で打てた」と3安打の川井は言う。コンパクトなスイングで三振ゼロ。短期間で課題を修正し、その打力を証明した。

祐屋と谷、川井の3人は、この1年で唯一、優勝できなかった昨夏の主力。雪辱の夏に向け、まずは昨年の春、秋に続く県王座をつかむ。（岡崎創史）

光南	打	安	点
④南	3	0	0
⑧本	5	1	0
⑦野	3	2	0
⑥田	2	0	0
⑨塚	5	2	0
⑤部	2	3	0
⑩岡	4	0	1
①田	3	1	0
②尾	1	1	0
③村	1	0	0
⑧大	0	0	0
⑨岡	1	0	0
⑥神	0	0	0
⑤藤	1	0	0
④三	0	0	0
⑦金	2	0	0
②大	1	0	0
①小	0	0	0
HR 1	0	0	0
H 1	0	0	0
⑥花	0	0	0
⑨山	0	0	0
⑤金	0	0	0
中	1	0	0
計	31	9	3

倉敷商	打	安	点
⑨祐	5	4	3
⑤谷	4	1	1
④横	4	1	0
⑧藤	4	2	0
⑦田	3	0	0
③福	1	1	0
⑥原	3	2	1
②西	2	2	0
①川	4	3	0
⑧畠	2	0	0
⑩井	4	2	1
HH 1	1	0	0
安	0	0	1
福	0	0	0
永	0	0	0
計	31	14	7

	打	安	点	四	死	残	併
光南	37	3	1	0	1	1	1
倉敷商	31	4	0	1	7	2	2

	長打	球数	暴投	失策
光南	1	111	0	3
倉敷商	2	101	1	0

準決勝

準々決勝

倉敷商投手戦制す

背番号10好投

明誠学院 0000000000 0
倉敷商 0000000001 ×10
▽三塁打 谷▽二塁打 水川、岡田▽暴投 横川

【評】ともに無失策の投手戦を倉敷商が制した。先発した右横手小原は球威ある直球で押し、8回を4安打無失点。四死球ゼロとリズムが良く、得点圏に走者を背負った三、四回は盗塁死と併殺で切り抜けた。打線は八回、岡田の二塁打を足場に2死三塁とし、原田の中前打で均衡を破った。

明誠学院は好投した左腕横川を援護できなかった。（片岡尚也）

8回を投げ、4安打無失点と好投した倉敷商の小原＝倉敷マスカット

明誠学院		打	安	点
⑥	小林	4	0	0
⑤	水川	4	2	0
②	松岡	3	0	0
⑦	元田	3	0	0
⑧	岡本	3	0	0
③	常軒	3	0	0
④	佐藤	3	2	0
①	横川	2	0	0
⑤	畠	3	0	0
	計	28	4	0

倉敷商		打	安	点
⑨	祢屋	3	1	0
④	原田	4	1	1
⑦	橋本	4	1	0
⑩	田口	4	1	0
⑥	福島	3	0	0
⑤	谷	2	1	0
⑧	川井	3	0	0
②	岡田	3	1	0
①	小原	2	1	0
H	岡	1	0	0
1	畠木	0	0	0
	計	29	7	1

明5010021
振球犠盗失残併
倉4110061

初戦で好投した現エース木村に触発された。倉敷商の立役者は元背番号1の小原だ。8回を被安打4、無四死球。「いつか打ってくれると信じて投げた」。打線の援護がない我慢比べの展開で、スコアボードにゼロを並べた。

右横手から繰り出す威力十分の直球と鋭いスライダーで相手打線をねじ伏せる。味方の好守もあり、ピンチらしいピンチはほとんどなかった。

投手陣では唯一、昨夏の岡山大会でベンチ入りし「余裕をこいていた」と振り返る。主戦として期待された昨秋の中国大会準々決勝では木村とともに四死球を連発。このオフは1カ月半、グラウンドへの立ち入りを禁じられた。「公園で壁当てをしたり、近くの川で草抜きをしたりしていた」時間で慢心のあった自身を見つめ直し、自分の弱さを受け入れられるようになった」と森光監督は話す。

倉敷西中では倉敷市内の選抜チームで全国大会準優勝。高校入学後、熾烈（しれつ）な競争を勝ち抜くため上手投げから横手に変えた。左の木村、長身右腕の畠木とはタイプの異なる背番号10が力投し、紙一重の勝負を制した。（片岡尚也）

2回戦

倉敷商 投手戦制す

無四死球で1失点完投した倉敷商のエース木村＝倉敷市営

倉敷商 0200000000 2
岡山南 0000001000 1
（倉）木村＝岡田
（岡）高城、万代＝松井
▽暴投 高城（岡）

【評】倉敷商は4安打に封じられながら逃げ切った。二回1死一、三塁で岡田の中前打で先制し、なお2死一、三塁から敵失で2点目。ただ、打線は四回以降、無安打と振るわなかった。左腕木村は無四死球とリズム良く投げ、バックは無失策で応えた。

岡山南は先発右腕の高城が8回を自責点1と好投したが、打線が援護できなかった。（岡崎創史）

四死球与えず 木村1失点完投

「嫌な記憶があった」というマウンドで悪夢を振り払った。会場は昨秋の中国大会で投手陣が計14四死球と自滅した同じ倉敷市営球場。倉敷商のエース木村は四死球を一つも与えず7安打1失点で完投した。

ナチュラルにシュートする直球を丁寧に低めに集め、凡打の山を築く。1点差の八回2死一、三塁は相手4番をフォークで空振り三振。ピンチでも表情を変えず、126球を淡々と投げ抜いた。

秋に足りなかったのは「相手に向かっていく気持ち」だった。捕手岡田が「ミーティングではいつも隅っこにいた」と評す寡黙な左腕は発言の機会が増え、大黒柱の自覚が芽生えつつある。

4月に入り、練習試合のある週末などを除き、「時間がある限り、ひたすら走った」と木村。精神面に加え、下半身の徹底強化に努める背番号1が投手戦で成長の跡を示した。（岡崎創史）